

ハプニング

2008(平成20)年9月21日鑑賞〈ホクテンザ2〉

★★★



監督・製作・脚本＝M・ナイト・シャマラン／出演＝マーク・ウォールバーグ／ズイー・デシャネル／ジョン・レグイザモ／アシュリン・サンチェス／ベティ・バックリー（20世紀フォックス映画配給／2008年アメリカ映画／91分）

……ニューヨークで突然始まった「ハプニング」が次々と拡大。人類はこのまま死に絶えてしまうのだろうか……？ 見えざる敵の恐怖とそこからの脱出。主人公たちの営みの意味は、一体どこに……？ テロ説とウイルス説が主流だが、植物反撃説の可能性は？ 人類が『ハプニング』から学ぶべきことは多いが、人間は忘れっぽい動物。「災害は忘れた頃にやってくる」と言葉の重みをかみしめなければ。

77億、29億、34億、17億、10億、そして……？

この数字はナニ？ これは、インド生まれの“映像作家”M・ナイト・シャマラン監督作品の興行収入の数字。シャマラン監督を一躍有名にしたのは監督第3作である『シックスセンス』（99年）だが、その興行収入は77億円と断トツ。その後、『アンブレイカブル』（00年）が29億円、『サイン』（02年）（『シネマルーム2』237頁参照）が34億円、『ヴィレッジ』（04年）（『シネマルーム6』310頁参照）が17億円とまずまずの成績を残していたが、『レディ・イン・ザ・ウォーター』（06年）（『シネマルーム12』72頁参照）は10億円と最低の数字だった。そのうえ、これはラズベリー賞受賞という不名誉なおまけまでついたから、このところシャマラン監督の威光は落ち目……？

こりゃ、「世界のキタノ」こと北野武監督の12作目『TAKESHIS』（05年）（『シネマルーム9』398頁参照）と、13作目『監督・ばんざい！』（07年）（『シネマルーム15』416頁参照）が“不振”だったのと同じ……？ そんな中、北野武監督が『アキレスと亀』（08年）で久しぶりに真面目な作品（？）に取り組んだように、シャマラ

ン監督もそれまでの作風を大きく方向転換(?)して『ハプニング』を? して、その『ハプニング』の興行収入は……?

相変わらず、「ネタばれ厳禁」の法則が

『シックスセンス』の謳い文句は「結末は絶対に明かさなさいください」だったが、『ハプニング』においても、シャマラン監督の「ネタばれ厳禁」の法則が継続中。それは、この映画のパンフレットに、「注意! このパンフレットは全て映画観賞後にお読みください」と書いてあることから明らか。

私はこの映画の試写を日程の都合で見逃し、しかも一般公開からかなり遅れた9月21日にホクテンザ2で観たから、ある程度ネタばれ的な評論を書いても怒られないと思うので、若干のネタばれ気味になることを覚悟のうえで、いくつか私なりの視点を……。

見せる? 見せない? それが問題だ

「To be, or not to be」はシェイクスピアの『ハムレット』における有名なセリフだが、『ハプニング』では「見せる? 見せない? それが問題だ」となる。そう言われると、さて何を見せるの? 見せないの? という目的語が気になるはずだが、それは恐怖の実態。

『ハプニング』はニューヨークのセントラルパークで発生したある怪奇現象からスタートし、それがフィラデルフィア、ボストンとアメリカ東部に広がっていく様子が描かれる。その怪奇現象の第1の徴候は言葉の錯乱、第2の徴候は方向感覚の喪失、そして第3の徴候が死という恐ろしいもの。つまり、なぜか人間が自分で自分の命を断つようになってしまうわけだが、それはなぜ? その原因はナニ?

テレビニュースでは、またコメンテーターや知識人たちが述べるのは、テロ説もしくはウイルス説を核とするものだが、さてその実態は……?

それがわかれば対策の打ちようもあるが、わからない以上どうしようもなく、ただ手をこまねいて死を待つだけ? そして、アメリカ全土の壊滅を待つだけ?

主人公は? その親友は? その娘は?

この映画の主人公は、えらくカッコいい授業をやっている科学教師のエリオット・

ムーア（マーク・ウォールバーグ）とその妻アルマ（ズーイー・デシャネル）。そしてそれに絡む、つまりニューヨークからの脱出を図るエリオットとアルマと行動を共にするのが、エリオットの同僚で数学教師のジュリアン（ジョン・レグイザモ）とその一人娘のジェス（アシュリン・サンチェス）。ここにジュリアンの妻が同行していないのは、彼女は今プリンストンというまちにいるためだ。

エリオット、アルマ夫婦とジュリアン、ジェス父娘のニューヨークからの脱出行は鉄道によるものだったが、列車は突然ペンシルバニアという小さなまちで停車することに。その理由を問われた車掌の回答は「誰とも連絡がつかなくなったから」というものだったから、この先の不安は募るばかり。乗客たちはやむなく近くのレストランに入ったが、そこで観た、ある乗客のケータイのモニターに映る衝撃の映像とは？

それを観たジュリアンは一人娘をエリオットとアルマに託して、1人別行動に。それはプリンストンにいる妻の救出に向かうためだが、さてジュリアンが乗せてもらった車に訪れる悲劇的な結末とは……？

シャマラン監督らしく、いくつかのサインが

この映画で明かしてはならないもの。それは、恐怖の実態。もっとも、『シックスセンス』でもカンの悪い人は最後まで「あのヒミツ」に気づかなかったようだが、カンのいい人は早くからマルコムは既に死んでいたという「決して明かしてはならないヒミツ」に気づいたはず……。つまり、映画はいくら隠しても最後にはネタばれとなることが避けられない芸術だから、シャマラン監督はこの段階、あの段階、そしてこのシーン、あのシーンでそのヒントを示してるわけだ。

そう考えるとこの映画では、冒頭の字幕表示のバックが雲が大きく流れていく空であることが気になる場所……。また、列車から降ろされたエリオットたちが移動する際の、風や樹々の葉っぱの動きがえらく気になる場所。ひょっとしてこれは、シャマラン監督らしい何かのサインかも……？

植物に防御本能が？ コミュニケーション能力が？

若干ネタばれ覚悟で紹介しておきたいのは、この映画には本格的に評論すれば面白い科学的論点がたくさん含まれていること。原因不明の、また正体不明の見えざる恐怖は現実にはいろいろあり、その科学的解明が後回しになるのは仕方ないが、その科学

的論点はこの映画の中でいろいろと提示される。

その1つが、エリオットが授業で生徒たちに語りかける「ミツバチが全米各地で姿を消している」という異変の実情とその解釈。そしてもう1つが、エリオットたちの脱出行の中で、車に乗せてくれる男が語る植物の防衛本能やコミュニケーション能力についてのうんちく。つまり、人間たちが植物の生存を脅かすようになれば、植物は人間に有害な化学物質を放出して反撃することもありうるという説明だ。テレビニュースの中でコメンテーターたちが語る怪奇現象の原因は、テロ説とウイルス説が主流だが、この男が言う植物反撃説は意外に傾聴に値するのでは……。

夫婦の絆は、危機の共有によって

『ハプニング』の興味の対象の8～9割は、アメリカ全土の崩壊を招くかのような「見えざる恐怖」の実態と、そこからの脱出劇の行方。しかし、それを演ずる主人公たちがエリオットとアルマそしてジュリアンの娘ジェスである以上、各人のキャラとそれが絡み合う人間ドラマの色彩が出てくるのは当然。

エリオットとアルマはまだ子供のいない夫婦。しかし、怪奇現象が発生する中で、学校から自宅に戻り、妻アルマを伴う脱出行に臨んだエリオットとアルマの夫婦関係は何となくギクシャク気味。しかもそれが、いくら同僚とはいえこんな大変な状況の中、エリオットがジュリアンの娘ジェスを一緒に連れていかざるをえなくなったため、一層増幅されることに。もちろん、脱出行をリードするのは科学教師らしく常に冷静沈着で明快な行動方針を示すエリオットで、アルマはそれに何の異議も述べないで従っていたが、さて彼女の本心は？

このように、若干気持のすれ違い状態にあったエリオットとアルマ夫婦だったが、脱出行の中で危機を共有し、力を合わせてさまざまな危機を切り抜けていくことによって夫婦の絆が次第に深まっていったのは当然。そんなストーリーが何の外連味もなくストレートに展開していくから、『ハプニング』では興味の対象の1～2割はそこから方面にも……。

2つのエピソードは何を暗示？ その1

エリオットたちの脱出行は、何のために？ どこに脱出？ 生き残りの見込みは？ などが全くわからない中での行動だから、不安がいっぱい。ちなみに、何度もテレビ

で放映されている『ポセイドン・アドベンチャー』（72年）におけるスコット牧師に率いられた脱出行は、「船はきっとひっくり返っている。だから、とにかく船底に向けて脱出すれば助かる可能性が高い」という方針が明確だから、それがこの場面、あの場面の危機を切り抜ける原動力となる。しかし、エリオットたちには、全然明確な方針が見えないから不安がいっぱい。

そんな中で示される2つのエピソードが興味深い。その1は、家の中に立てこもっている人たちが、食料を求めるエリオットたちを完全に拒絶するエピソード。エリオットはあくまでお願いベースで話をしていたが、冷たい態度に業を煮やした2人の若者が乱暴狼藉に及びかけると、中から銃弾が……。不安が極限に達すると人間ここまでやるの？ これは、『ミスト』（07年）で観たあの風景（『シネマルーム19』435頁参照）と同じ……。

2つのエピソードは何を暗示？ その2

それと対照的に、エリオット、アルマ、ジェスの3人を快く（？）受け入れてくれたのが、人里離れたところに1人住む老婦人ミセス・ジョーンズ（ベティ・バックリ）。エリオットたちがなぜそんな辺鄙な場所にたどり着いたのかは、映画を観て理解してもらわなければならないが、ミセス・ジョーンズがここで1人隠遁生活をしているのは、人間も社会も信じられないため。彼女が神のどんな教えを信仰しているのかは明確ではないが、少し不気味なキャラであることはたしか。それでも食事と一夜の宿は必要だから、3人はお世話になったのだが、そこで起きるハプニングとは……？

エリオットの根気はどこまで？

怪奇現象はニューヨークのセントラルパークからアメリカ各地に広がっているが、『ディープ・インパクト』（98年）のように巨大彗星が地球にぶつかってくる危機ではない。したがって、いつか、どこかで終焉を迎えるものと予想し期待していたが、もちろんそれは何の根拠もないもの。

そう考えると、あくまで生存の可能性を信じ、できる限りの努力を続けているエリオットの根気がいままで続くのが大問題。エリオットはとりあえず一夜をミセス・ジョーンズの家で過ごした後、再度脱出行に出発するつもりだったが、翌朝目を覚ますとアルマとジェスがいないからビックリ。ここらあたりの状況設定が少し恣意的な

ところが私は気に入らないが、この時アルマとジェスはあるところで楽しく遊んでいたよう……？ さらに、ミセス・ジョーンズの姿も見えないから、エリオットが用心しながら調べてみると……？

まあ、何やかんやの「ハプニング」を見せながら、ここで起きる最大のハプニングは、庭に出ていたミセス・ジョーンズもアウトになってしまうこと。さあ、それはなぜ？ そして、エリオットの根気はどこまで？

冷静なエリオットがなぜ？

怪奇現象の発生以降、エリオットの下す判断と行動は常に冷静沈着そして合理的・理性的。ところが今、エリオットとアルマ、ジェスは違う場所に「隔離」されていた。そこで、エリオットのとった行動は、「1人で死にたくない」「愛する人と一緒に死にたい」と宣言し、死を覚悟して家の外へ出ていくものだったから、私はビックリ！

あの冷静なエリオットが、なぜ今そんな無茶な行動を？ と思ったが、そこでシャマラン監督が用意したアツと驚く結末とは？ それはあえて言えば、暴走した愛でも、やはり愛は勝つというものだが……？

もう1つの味つけが……

ニューヨークのセントラルパークから始まったあの怪奇現象は、明確な理由がわからないままある日終焉を迎え、結局エリオットとアルマ、ジェスは幸運にも生き残ることになったから、これにてハッピーエンド。シャマラン監督の映画がそうなるはずはない。

そう思っていると案の定、スクリーン上には3年後のエリオットとアルマ、ジェスの姿が登場する。あの危機を共に切り抜けたことによってエリオットとアルマの夫婦の絆は強まったようだ。また、気持よくジェスを学校に送り出しているエリオットの姿を見ると、今やジェスは2人の子供？ そんな風に思えるほどこの3人は仲良く暮らしているようだが、あの怪奇現象は1度きりの突発事故？ そう心配していると、スクリーン上は……？

1995年1月17日の阪神・淡路大震災から既に13年。人間は忘れっぽい動物。したがって、「天災は忘れた頃にやってくる」とは言い古された言葉だが、あらためてその言葉の重みをかみしめなければ……。 2008(平成20)年9月24日記